

チューターの異文化理解とチューター制度について —チューターからの報告を中心とした実態調査より—

櫻田千采・島 弘子・松下美知子
(八重澤)

I. 問題と目的

新たに来日した留学生に対し、学習と研究の向上を図る目的でチューター制度が設定されて以来、金沢大学でも、チュータリングの実質的な充実を目指して、直接的・間接的に様々な検討を重ねてきた。留学生の受入れにあたっては、教職員だけではなく、日本人学生をも含めた全学的な協力・支援態勢が必要とされたからである。

留学生センター設置以前、学内措置でおかれた留学生教育センターでは、既に1993年の時点で、チューター制度についてのパネルディスカッションを行っている。留学生の指導教官、日本語担当講師、留学生担当カウンセラー、留学生係、チューターである日本人学生と共にそれぞれの立場より制度についての検討を行ったが、その内容については金沢大学留学生教育センター紀要第2号(1993.10)に報告済みである。

その後1995年に留学生センターが設置され、チューターに関連する全てが、留学生センター・相談指導部門の担当となり、それ以来下記の取り組みを行ってきた。

- ・チューター実施要項の作成・整備
- ・チューターのためのマニュアルの作成・整備
- ・チューターの承認
- ・チューター・オリエンテーションの実施
- ・チューターの指導計画・経過報告等の検討と分析
- ・その他、チュータリング全般に渡るアドバイジングとカウンセリング

ここでは、金沢大学でのチューター制度の現状について、チューターからの報告書を中心に検討を進める。その中でも特に、チューターとなった多くの日本人学生たちが、チュータリングを通して文化的な違いをどのように受け止め、異文化に対する認識を深めていったのかを取り上げて明らかにしたい。さらに、1995年の留学生センターでのチューター制度の整備を行った後のチューターの活動状況についても明らかにする。従って、ここでの具体的な目的を下記に記す。

1. チューター活動を通して異文化理解はどのように深化するのか
2. チューター活動の現状とより充実したチュータリングのための課題について

II. 手続き

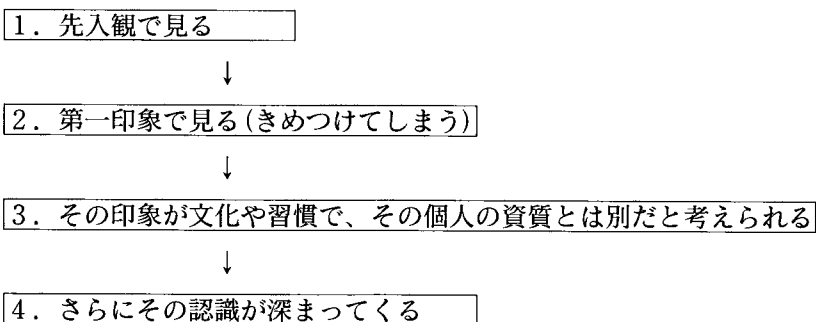
- ・対象 1997年度に留学生のチューターとしてチュータリングを行った日本人学生・留学生。これは1995年以来その整備を進めてきたチューター制度の運用が徹底された時期に当たるからである。チューターはオリエンテーションで、チューターの役割、活動等について十分説明を受けた後に、チューター活動に入った。
- ・方法 チューターから提出された指導計画・経過報告・年度（学期）末報告書の約60のレポートを中心に分析する。さらに、熱心なチューター活動を行っている学生に対しては、面接を実施した。

III. 結果と考察

① チューター活動を通じての異文化理解の深まり

一般的な深化のパターンとして次のことを認めることが出来る。

チューターをすることによって、異文化理解がどの程度深まってくるのか、をチューター経験1年目のあるチューター自身（以下A）の言葉で言えば



という段階まで来たということで、これは、まだ留学生を外側から観察する段階ではあるが、その深化の様子を示している。

このチューターは、アジアの国の文化や人々に旺盛な好奇心と好意をもっているにもかかわらず、イスラム圏の留学生に対しては「校内で禁煙を守らない」「集団でパーティーの時間に遅れる」などから好印象を持っていない。さらに、「日本人なら、若干遠慮というものがあるんじゃないか」と、感じている。その一方で、研究室で親しくなった韓国人留学生に対しては、その国に行ったとしても違和感がないのではないかと、

と思うくらいの親近感を抱いている。韓国の文化は儒教文化で、それはわれわれ日本人には新しいものではない。しかし、イスラム文化は新しく接した文化であり、彼らの行動パターンがまだよく理解できない。その差が、チューターのいづく印象に影響を与えている。

Aには、チュータリングそのものより留学生との交流が面白い、あるいは自分の将来希望している仕事（地場産業の工業製品を海外で販売する）に非常に役立つ体験をしているなど、留学生との関わり合いについて積極的評価が見られた。

一方大変熱心にチュータリングをしている学生には、相手が外国人という意識があまりなく、日本人学生でも同じ対応、感触であろうというものであった。チューターB（チューター経験が1年以上）にとっては、目の前にいる学生が困っているから助けようということで、留学生だからという意識はないようだった。しかし、チューター活動に入っていけばいくほど、留学生が日本語で教育を受ける困難さに気づき、手助けをしたいという気持ちが強くなっていったようだ。

異文化理解促進の要素として考えられるのは、「いっしょに料理を作る」、「旅行する」などの行動を共にする機会があるかどうかということである。学部生のチューターは「チューターをすることによって、いままでは通り過ぎていく存在だった留学生が、どんな生活をしているのかを理解し、よい点は見習おうという気持ちになった。」と述べた。また、他のチューターは留学生から家族の写真を見せられて、家族の話をよくすることに気づき、日本人はこんなに家族の話はしないのではないかと思ったという。

このように、自国の文化や習慣、言葉を説明する場合、そこでは当然比較がなされる。自国と相手国の違いを明確にすることで、今まで当然と考えていたことが当然ではないと考える文化もあることに気づき、異文化理解は深まる。すなわち、異なるものへの気づきが、異文化理解の第一歩といえよう。それは、さらに自文化への理解をも促すことにもなり、自分の文化、考え方を客観的に見ることができるようになる。

学部生のチューターをした学生は「初めは日本の文化や日本人の考え方を積極的に教えられなかったが、それは相手が欧米人であることに自分が無意識にコンプレックスを感じていたからだ気づいた。そう気づいたら、相手と素直に接することができた。」と感想を述べている。

さらに、留学生との接触を通して、違うことが当然ということを理解する事も大切な異文化理解である。

② チューター活動の状況

留学生が文系か理系か、あるいは学部生か大学院生か、あるいは長期滞在か短期滞

在かなどによって、要求されるチュータリングが違ふし、必要度も違ってくる。
必要とされるチュータリングの内容は、おおよそ表に示したように分類される。

所 属	日常生活面	学習面(専門分野)	日本語	日本文化・日本事情
文 系	○	○ 専門書の読書援助◎	○	○
理 系	○	◎	○	
院 生	○	○ 入試対策◎	○	
学部生	○	◎	○	
短期生	○		◎	◎

現在もっともチュータリングに熱心に取り組んでいるのは学部生のためのチューター達である。

そこには一人の献身的なチューターの存在があり、そのチューター抜きにしては現在の学部生のチューター制度は考えられない程である。

<学部生のチューター制度>

学部生のチューター制度は原則として2年間で、現在チューターのついている留学生は約20名である。チューター実施要項に従えば、留学生の専攻と同じ研究室からチューターが選ばれる。学部によってはキャンパスが違ふので、総合教育を受講している1、2年生の学部生は専門課程にいるチューターと日常的に会うことができない。従って、受講科目の中でも留学生が共通して理解できない教科については、総合教育棟の留学生相談室を拠点にして学習会を開くことにしている。これらの活動は学習会のためのコーディネーター的な役割を果たしているチューター（自然科学研究科後期課程・チューター活動4年目）を中心に、すべてチューター達の自主的な活動による。

○定期的な活動

総合教育棟（主として、学部1、2年生対象の授業が行われる）の留学生相談室を拠点として続けられている活動は以下の通りである。

毎日昼休み、学部生のためのチューター有志が一人ずつ当番となって部屋に待機し、学習をはじめとして留学生のあらゆる相談に応ずる。留学生も特に用がなくてもこの部屋に出入りしている様子が見られた。（常時、留学生とチューターの7、8人から10人が在室）

週に1回、主として、工学部の留学生などを主な対象として、理工系の専門教科の学習会を開いている。この学習会は、留学生側から希望の出た教科を専攻しているチューターを探し（いない時はチューター以外でも）時間の調整をして学習会を開く。

○恒常的な活動

授業のノートを見ながら復習の手助けを行っている。日本語力が授業に追いつけないのは、学部1、2年生に共通の悩みである。教官の中には教科書を用意しないで、黒板だけで授業をする人もあるが、これは留学生にとってはかなり大きな負担になる。さらに、せっかく取ったノートが、教官の話すスピードについていけなくて意味不明だったり漢字を間違えていたりで、役に立たないこともある。

チューターの専門ではない教科については、留学生とともに「先生の授業が分からないという学生がこんなにいるんですけど」と言いに行ったこともある。（その時の対応として「日本人の学生も落とすから。気長にがんばって。1回や2回落ちたくらいでショック受けないで。追試いっぱいやるから」と教官から言われ、留学生は「フーッ」とため息をついた。）

日本の高校では必須教科となっているものが、自国ではそうでなかったことから、大学での専門の講義が分からないという留学生のために、週1回程度定期的な復習援助をしたり、試験の前に再度復習するなど、工夫している。

○その他の活動

年に数回のパーティーや年に1回の2泊3日程度の旅行などの行事を実施している。

学部1、2年生の場合は留学生相談室に行けば、必ずチューターか誰かいて、相談に乗ってくれるという体制を作っていることが大切である。分からないことは、ここで聞けば良く、日本人学生だけでなく、同国人の先輩もいて、留学生相談室の果たしている役割は大きいといえよう。

<院生の場合>

院生には大学院入試前の研究生の期間も含み、原則として、チューター期間は1年である。

学部生と違い、院生および研究生の時期は来日当初から各研究室に所属する。当然チューターも通常は同じ研究室の学生が担当するが、大学院入試の試験勉強をみても問題の中には、難しくて担当のチューターだけでは手に余るという場合もあり、研究室のメンバーが全員でバックアップするという集団学習の形態をとることもある。

○学習面でのチュータリング

学習面や専攻決定などの入試対策に関する援助を行う。

専門に関するものとしては、下記のもものがあげられよう。

・工学系は研究に入る前に必要なレクチャーをする。中にはシラバスのようなものを作り計画的に講義や演習をしているチューターもいた。

・文系理系ともに専門用語の知識、漢字の読み方、専門書を独力で読める日本語力養成。

(日本語講師の立場からは、ここまで一人のチューターに要求するのは難しいと思われる。)

○日常生活面でのチュータリング

校内外の事務的な手続きや住居やアルバイトを探すときの援助を行う。

<文系と理系のチュータリングの違い>

理系においては、専門教科を理解し、研究生生活に入るためのチュータリングが第一であるため、チューター自身も学んできた経験を生かすことができ、留学生にとって必要なチュータリングというものがよく見えている。従って指導計画を立てる段階から迷いもなく、また終了時の達成感も大きい。

一方、文系は理系に比べると留学生個人でできる範囲が広く、チューターの必要度が低い。指導計画を立てる段階から、チューター・留学生双方とも目標を明確化し得ず、チューターの達成感も小さい。「担当留学生は自分のチュータリングを必要としていなかったのではないか」という感想を述べたチューターもいた。

<短期留学生のチュータリング>

短期留学生の場合は日本語、日本文化、日本事情などに学習内容が限定されている事が多い。留学生によっては、チューターからより多く日本のことを学び取ろうと積極的であるが、中にはチューターを必要とせず、ほとんどかかわる機会を持たない留学生もある。

短期留学生から日本語の専門的な質問を受けてもうまく答えられなかったり、どこまで教えていいのか分からなかったという感想の記入も見られた。

短期留学生の中には日本語力の低い者もいるので、日本語を短期留学プログラムの必須科目としている本学においては日本語学習のサポートがチューターの大きな役割となろう。そのためにはもう少し組織だったチュータリングの方法が考えられる。主として日本語を教えたいチューターと支援を希望する留学生をマッチングし、現行の日本語のクラスとの連絡を密にし、日本語教師を含め三者で協力する体制であるが、どうであろうか。

③留学生チューターによる留学生のためのチュータリング

自分自身が留学生であり、留学生のためのチューター活動を行っている学生が6名

含まれていた。

彼らと日本人チューターとの違いは、かつての自分の経験を生かそうとする姿勢が強く、留学生にとって何が必要かをよく心得ていることである。特に自国の留学生についてチューターは、日本人の考え方や、研究室のルールを教え、なるべく日本人と同じように行動すること、そのためには日本人学生と教官のやり取りなどを観察するように、など後輩の留学生が無用のトラブルを起こさないように細かなアドバイスを与えている。

アルバイトを探すことにも積極的に関与し、親身に世話をする。

IV. 今後の課題

上述した点をふまえて、今後のチューター制度の内容の改善のためには次の3点が考えられる。

① チューターリングの形態を柔軟にする

学部生に対する留学生相談室での活動や、理系の大学院入試前の研究生に対する指導のように、研究室全体で支援体制を取っている現実を考えると、現在の留学生1人にチューター1人という形態を守るのではなく、それとは別に、集団のチューターリングという考えもあってもよいのではないかと思われる。

それは、現在のように特定の研究室やチューターの個人的な好意をたよりとするのではなく、全学的なバックアップ体制が有効と考えられるからである。

学部留学生に対する現在ある留学生相談室のようなものつまり、必要なときには、いつでも、誰でも利用できる学生の溜まり場のようなものを作ることを提案したい。そこでは、日本人学生も留学生も集まって、必要な情報が与えられるようなシステムになっている。このようなシステムは特に来日間もない学生にとっては、非常に効果的である。

② チューターに対するケア

「その程度のことなら一人で大丈夫だからサポートは要らない」と言われた学部留学生のチューターや、専ら留学生の話の聞き役で、「自分は本当に必要とされているのか」と悩んでいたチューターがいた。

そのチューターの自己評価を見ると、「最後に自分がどのくらい留学生から必要とされているか」を5点法で評価するようになってきているところの評価が、非常に低い評価になっている（3点が4、2点が5）。自分でつけていますます気持ちさが萎縮してし

まったのではないかと気の毒になってくる。

新規留学生だから機械的にチューターをつけるというのではなく、教官が双方をよく観察し、本当に必要な所に必要な援助が行くように、チューター側にも教育的な配慮をもって充分達成感を持たせることが大切である。

また、報告書の中には実におざなりで、毎月同じ事を印刷したように書いてあるものもあった。そうした事態に陥らないように、教官は始めの一月は注意して様子を見る、問題が起こったら相談に乗る、などの配慮が必要であろう。

また、チューターが異性か同性かの問題もある。つまりアジア系女子留学生は、ついたチューターが異性だと遠慮して何も問題がないと言っているのではないかと推測される状況があり、留学生とチューターの組み合わせに対する配慮も必要と思われる。

③留学生チューターの採用を

チューターは日本人学生に限るわけでも、日本人学生の異文化理解のためだけにあるのではない。留学生の日本での生活がより円滑に行くように存在する制度である。留学生チューターの留学生に対する対応を見てみると、年齢的なこともあるが、たいへんよく面倒をみている。精神的なケアも含めてチューター制度を考えるなら、留学生チューターはもう少し増えてもよいのではないだろうか。

On cross-cultural understanding of tutors and tutor system — A primary research with tutor's reports —

ABSTRACT The purpose of this paper was to reveal the present situation of tutoring activity after the tutoring system was reorganized in 1995. Next two points were particularly focused.

1. How does cross-cultural understanding deepen by means of tutoring activity ?
2. What is the task to improve tutoring based on the current tutoring activity ?

About 60 reports handed in by tutors were analyzed. In addition, intent tutors were interviewed. Result were as follows.

1. The opportunity to work together surely promoted to understand cross-culture, but the other factors, finding differences and gaps between cultures, objectively evaluating own culture were also important.
2. The different tutoring was required for the different types of international student, undergraduate/graduate, type of major, short-term program or not.
3. In order to enhance tutoring activity, the peer tutoring style should be flexibly practiced, tutors should be motivated through achievement, and international students should be employed as tutors.